

「癒し」としてのコミュニケーション

—メイドグラフィティ in 大阪日本橋 (3) —

池田太臣

(甲南女子大学人間科学部)

はじめに

本稿は、大阪市浪速区日本橋にあるメイド喫茶で、「メイド」として働いている女性たちのインタビュー結果報告の第3弾である。今回報告するのは、3名のインタビューである。これらのインタビューはすべて、2013年9月に、Aカフェ近くの喫茶店にて行われた¹。前回²および前々回³に紹介したインタビューは、2名ずつであったが、今回は一人ずつ話を聞くことができた。

インタビューを行った3名のメイドは、全員、大阪市浪速区日本橋にあるAカフェで働いている（現在は辞めている者もいるが、インタビュー当時は、全員現役であった）。このAカフェは、2005年より続く、日本橋では“老舗”のメイド喫茶である。

1 インタビュー対象者について

今回、Aカフェで働く3名の女性に、メイドとして働こうと思った動機やメイド喫茶で働く楽しさなどについてインタビューを行った。

インタビュー対象者3名の年齢、社会的地位、Aカフェでのメイド歴（およびより詳細なインタビュー日時と場所）に関しては、以下のとおりである。

Mさん…21歳、フリーター、Aカフェでのメイド歴1年（インタビュー日時：2013.09.11, 15:23-16:25 Aカフェ近くの喫茶店Aにて）

Iさん…20代、フリーター、Aカフェでのメイド歴5ヶ月（インタビュー日時：2013.09.11, 17:50-18:53 Aカフェ近くの喫茶店Bにて）

Jさん…23歳、フリーター、Aカフェでのメイド歴：約1年4か月（インタビュー日時：2013.09.11, 19:05-20:00 Aカフェ近くの喫茶店Bにて）

次から、インタビュー内容を紹介していきたい。その際に、以下の4点に分けて紹介する。すなわち、(1) Aカフェで働こうと思った動機、(2) オタク文化との接点、(3) メイド喫茶でのコミュニケーション、(4) メイド喫茶で働いていることを周囲に話しているか、である。

彼女たちの発言は、読みやすいように、こちらで表現を修正したり省略したりして、ある程度整えてある。また、メイドの発言中の () は池田の“あいづち”ないし質問であり、池田が発言中の () は、メイド側の発言である。(笑い)はそのときの発言者の笑いを、(一同 笑い)は、メイドと池田とも笑っている状態を指している。

¹ ただ、同一の喫茶店ではない。一人目と二人目の間に、近くではあるが、別の店に移っている。これは、最初にインタビューをしていた喫茶店が、閉店時間になったためである。

² 池田太臣「オタク的コミュニケーションの悦楽～メイドグラフィティ in 大阪日本橋 (2)」『女子学研究 4』(女子学研究会編：2014,14-23)

³ 池田太臣「オタク女子の樂園～メイドグラフィティ in 大阪日本橋 (1)」『女子学研究 2』(女子学研究会編：2012,76-90)

最後に、太字と下線で強調してある箇所は、池田によるものである。前回と前々回ではしていなかったが、今回、筆者が重要だと考える箇所には、太字と下線で強調をするようにした。

2 Aカフェで働こうと思った動機

○Mさんの場合

—Aカフェでメイドとして働こうと思った動機を聞かせてください。

Mさん：中学生くらいの時から、メイドさん自体にあこがれがあったんですよ。（なるほど）それで、学校が一応終わって、暇ができたというか、やれる時期が来たので、せっかくだからやってみようと思って、始めました。

—メイド喫茶のことは、どのように知りましたか。

Mさん：そうですね。多分その頃が、メイド喫茶というかオタク文化の一番のブームの時だったと思うんですよ。テレビで特集とかやっていたり、たぶん『電車男』とかもその時だったと思います。（それは中学生の時ですかね）だいたい中学生だったと思います。

—中学生の頃のメイドさんのイメージって、どんなものでしたか。

Mさん：えー、でもなんか、なんていうんですかね。かわいい服を着て、かわいくしゃべるような、そんな感じの（笑い）、漠然としたイメージでした。

—では、実際に勤めてみて、いかがですか。

Mさん：うちのカフェはイメージが特に違っていたなと思いました。いい意味で、あんまり気を張りすぎない感じが良かったです。

○Iさんの場合

—まずは、なぜAカフェで働こうと思われたか、その動機からお聞かせください。

Iさん：えーと、まず、えー、だいぶ前にさかのぼるんですけども、（はい、はい）5年ほど前に、一度受けるんですよ。高校を出たくらいの時に、一度受けて、あんまり、覚えてないんですけど（笑い）、そのときに、まあ、その時メイドさんとも流行ってて、一番、Aカフェがいいなあって、雰囲気とか、お店の感じとかも、“萌え萌え”の感じではなくて、落ち着いた感じだけど、活気のある、こう“カフェ”って感じなので、やっぱりAカフェがいいなあって、初めてここで応募したんですけど、その時は落ちてしまって。

で、そのあと普通に専門学校とか行って、ネイルとヘアメイクやってたんですよ。で、ネイルリストさんになって。（あ、ネイルリストされてたんですか）はい。ネイルリストやってんですけど、いろいろあって、アパレル関係のお仕事をずっとしてたんですね。ショップ定員とかしてて、で、そのあとに、たまたま、知り合いで、Aカフェがまた募集してるみたいだよっていわれて。「でも、あたし、一回落ちたから」って言ったら、いやその時の店長も、変わっているし（なるほど）、また受けた子でも、もう一回受けていいらしいよ、みたいなのをたまたま聞いて、「あ、そうなんや」と思って。で、やっぱり、してみたいっていう気持ちは、まあ、いまだにあったんで、（ふんふん）やるんだったら、年齢的にもこれがラストチャンスかなと思って、受けたんですよ。（なるほど）それでまあ、受かって、今に至る感じなんですけど。

もともとなりたかったのは、もちろん、メイド服の衣装も可愛くて大好きだし、私はアニメとかは知らない

んですよ。(あ、そうなんです)基本的に、アニメ・マンガとかは読まないで、わからないんですけど、アイドルが大好きなんです。(ああ、なるほどなるほど)で、アイドルオタクなので、そういう、なんていうんだろ、周りにアイドルオタクの方って、あんまり、女の子でもないし、男の人でもあんまり言ってる方いなかったの、ま、そういうお話も、ご主人様とだったら楽しくできるかなっていう理由で(なるほど)はい。

で、普通のカフェよりかは、こう、なんていうんだろ、自分が楽しみながら、接客ができるなあって。こう、言ったら、まあ、ご注文聴いて、お客さんが来たら注文聴いて、出してとか、ま、単純作業を繰り返すだけでも、その中で、カフェとは違う部分がいっぱいあるのが、メイドカフェだと思ったので、選びました。

Iさんは「アイドルオタク」であり、アイドルの話をしたくてメイド喫茶で働こうと思ったという動機が興味深い。私は、計9名のAカフェのメイドにインタビューをした。そのうち8名は、多かれ少なかれ、アニメやマンガ、ゲームといったACGカルチャーに親近感を持っていた。しかし、Iさんには全くそれがない。代わりに、アイドルオタクであるということが、メイド喫茶との接点になったのである。

○Jさんの場合

—まず、Aカフェで働こうと思われた理由は何でしょうか。

Jさん：年齢も、その時が22で、年齢的にも最後かな、やりたいことをやれるのは最後かなと思ったんで、すごいアニメとかも好きなんで、コスプレとかも、ちょうど22のときにコスプレとかも始めたんですけど、それやったら、なんか、飲食店でやったこともなかったんで、飲食店もやるし、どうせならかわいい服を着てやりたいと思ったんで、メイド喫茶に応募しました。

—なるほど。メイド喫茶を知られたのは、いつごろですか。

Jさん：高校生の時です。(何をきっかけで知られました?)同級生の子がメイド喫茶で働いていたんです。(高校生の時にですか?)高校生の時です。(それを見て、あー、メイド喫茶があるのだ)はい。(その時のイメージは、どんなイメージでしたか)萌え萌えですね。萌え萌え、ニャンニャン(笑い)(しかし、その「萌え萌えニャンニャン」なところで、良く働きたいと思いましたね?)そういうのが、あんまりないところに行こうと思ったんです。(あー、なるほどなるほど。ということは、応募される時には検索を)もう、すごい見ました。調べました。(しかしまあ、なんといいですか、かわいい服を着たいだけだったら、別に、メイドカフェでなくてもいいような気もするんですけども)すごい探したんですけど、やっぱり、メイド喫茶のメイド服が一番かわいいんです。(そうなんです)って、思ったんです。あと、やっぱりすごい、女の子とかも大好きなので、かわいい女の子に囲まれて、オタクな話をしながら働きたいと思って。

○まとめ

以上、3人が動機について語っている部分を紹介した。3人に共通している点が2つある。

まずは、3名がAカフェを選んだ理由、というかAカフェのイメージである。Iさんは、Aカフェの当時の印象を「“萌え萌え”の感じはなくて」「落ち着いた感じ」と表現している。またMさんは「うちのカフェはイメージが特に違っていたなと思いました。いい意味で、あんまり気を張りすぎない感じが良かったです」と述べている。そして、Jさんは「そういうの(=「萌え萌え」)が、あんまりないところに行こうと思った」と語っている。

3名の発言から推測するに、メディア上で流布されていたメイド喫茶のイメージは、「萌え萌え」なものだっ

たのだろう。そうしたイメージに影響を受けながらも、実際に自分が働くときは、「萌え萌え」なところを避け、「落ち着いた感じ」のところを選んでいる⁴。

このことは、次のことを意味している。すなわち、メディアの影響でメイド喫茶を知り、それに憧れを抱きながらも、働き手としての女性たちは主体的に場所を選んでいるということである。決して、メディアのイメージをそのまま再現することを目指して、女性たちがメイド喫茶を選んでいるのではない。そこには、彼女たちなりの考えと選択がある。そのことがうかがえて、とても興味深い⁵。

ここで付け加えておく必要があると思うが、彼女たち（そして筆者も）は決していわゆる「萌え萌え」なメイド喫茶を否定しているわけではない。ただ、彼女たちは、自分たちが働く場所としては選んでいないというだけである。「萌え萌え」な場所で働きたいと思う女性がいたとしても、それはひとつの選択である。そしてそこにも、やはり同じように主体的な決断の過程があるであろう。

第2点は、メイド服を“かわいい”と評している点である。メイド喫茶は、基本的には、男性を主なターゲットとしたサービスである。したがって、メイドスタイルは、男性に受けるためのスタイルでもある。にもかかわらず、女性たちがそれを“かわいい”ものと再解釈している点が面白い。

3 オタク文化との接点

ここからは、3人のオタク文化（アイドルも含む）との接点について紹介する。本稿は記録を主な目的としているので、少々長くなるが、インタビュー内容を紹介しておきたい。なお、紹介の順番は、必ずしもインタビューで話してもらった順番とは一致しない。たとえば、高校時代を先に話してもらい、その後中学時代にさかのぼった場合でも、ここでは中学時代を先に、そして高校時代の話の後に並べている。時系列を重視して紹介している。

OMさんの場合

——昔からマンガとかアニメとか、関心がありましたか。

Mさん：あー、昔からありました。（たとえば？ 中学生当時はどのようなアニメを）その時は『銀魂』とかよく見てましたね。（それは、テレビの方ですかね？）テレビの方で。マンガとかも小さい頃から、お父さんの趣味でマンガも家にいっぱいあったんですよ。『ドラゴンボール』とかなんですけど。そういうのとかは読んで過ごしていたので、たぶん親とかの影響があると思います。

——はじめてみた、マンガとアニメって何ですか。マンガか、アニメか。記憶にある・・・

Mさん：マンガで読んだのは、たぶん、『ドラゴンボール』とかですかね。あ、でも、少女マンガとかも読んでました。（お父さんがお持ちだったから、ということですか、『ドラゴンボール』は）『ドラゴンボール』は、うちにいつのまにかあったので（笑い）。（あれって、わりかし、暴力的なマンガなんですけども、女性から見ても面白い？）そうですね、うち、割りと過激なマンガと言うか（笑い）が多かったんですよ。『北斗の拳』とか『ジョジョの奇妙な冒険』とか。（そういう男の子っぽいマンガ・アニメも、全然抵抗なかったですか）ぜんぜんなかったです（一方で少女マンガも）好きでしたね～。（その当時ですと、どのような？）私の読んでいた頃は、CLAMPとか吉住渉とか、ってわかりますか（ちょっとわからないですけど）、そういうのばかり

⁴ 正確に言うと、Mさんはちょっと違っている。彼女の場合、Aカフェで働いてみて、そのことに気づいたと述べている。Aカフェの「萌え萌えでない」イメージが、彼女のAカフェ選択の動機にはなっていない。

⁵ とはいうものの、「萌え萌えを避けて」Aカフェを選んだとの発言は、9名中3名だけである。Iさん、Jさん、そして前回報告したRさんである。

読んでましたね。（それが小学生くらいですか、もっと前ですか）小学生か、もうちょっと前くらいでしたね。
『ママレード・ボーイ』とか。（『セーラームーン』とかは？）それも好きでした。でもそれは幼稚園とかで
したね。

——中学生の時に、同級生とマンガの話とかはしていましたか。

Mさん：あー、してました。『テニスの王子様』とか。（BLとかはいかがでしたか）そっちはまだでしたね。だ
いたい高校生になってから。

——部活動とかはされてましたか。

Mさん：部活動は、放送部と美術部に入っていましたね。（なるほど、美術部ですか）はい（どんな感じの絵を
描かれていたんですか）いや、でも、もうデッサンみたいな感じの絵で、アニメ系の絵は描けなかったんです
けど、普通のデッサンとかは割と好きでした。（アニメ系の絵を描こうとはぜんぜん思われなかった？）全然
うまく描けなかったんで（デッサンのしっかりしておけば、できそうなイメージもあります）やー、でも、
できなかつたんですよ、なぜか。（放送部は、放課後とか昼休みに話を？）そうですね。話もありますし、お
昼の時間とかに好きな音楽を流せたんですよ。そういうのでも、アニメソングとか流しちゃったり（笑い）し
てました（池田（笑い））。（アニメソングを流して、周りの反応はいかがでしたか）そんなにですね。アニ
メソングと言っても、アニメで使われている普通のアーティストとかの曲とかだったので（なるほど、普通の
アーティストとかがやっている感じの）タイアップされた曲とかですね。（当時ですと、たとえば、どんな曲
をかけてたんですか？）それも、その頃好きだった『銀魂』とかに使われていた曲とか（なるほど、『銀魂』
はだいたいアーティストがね、やっています）そうですね。

——高校ではいかがでしょうか。

Mさん：高校の方では、アニメとかはずっと見てました。コスプレとかはする機会がなかったんですけど。（高
校の友達というのは、わりかし、マンガやアニメが好きな子がいたわけですか）うーん、でも、そこでも、な
んかちょっと特殊なところに行ってたんですよ（笑い）。だから、そんなにアニメとかが好きっていう子は少
なかったですね。（なるほど。普通科ではなく・・・）そうですね、音楽の方だったので（あ、音楽の方にい
かれたんですか）そうなんです（なかなか多才ですね）いや（笑い）、全然ですけど（笑い）。（音楽はど
んな領域ですか？）私は、一時期ギターをしたかったんですけど、結局、全然やらずに終わってしま
いましたね。（高校のときは、アルバイトは全然されていない？）その頃は、こういう世界ではないんですけど
も、バイトしてました。居酒屋とかカラオケとかでバイトしてました。（なるほど、そういう経験をお持ちだ
ったわけですね）そうですね。

——その後、メイド喫茶に応募したのは？

Mさん：20歳くらいでしたね。学校を卒業して、ちょっと経ったくらいでしたね。（じゃあ、高校を卒業されて
から、ちょっと経った時期と）専門学校のほうですね（どんな専門学校ですか）美容の専門学校にいつてまし
た。（なるほどね。何か、特定の職業を目指されていたんですか？）そうですね、美容業界の方に行きたいと
思っていたんですけども、もう、就職する前にやりたいことをやっとうと思って。（じゃあ、ゆくゆくは美
容業界の方に？）そう、ですね～、それしかできることがないんで（笑い）。（えーと、美容師でしょうか）
美容師ではなくて、メイクの方ですね。（メイクアップアーティストを目指しておられたということですね）
そうですね。販売員とかですね、化粧品の。（なるほど、なるほど。それに関わるようなアルバイトは、いま
はされてないですか）いまはしていないですね。（いまはAカフェだけですか）Aカフェと靴屋さんでアルバイ
トしています。（掛け持ちって大変じゃないですか？）そうですね。もうなんか、きっちりわけないといけな

いので、たまに、Aカフェで使っているような言葉が、そっちのお店ですらになつたりは、（池田（笑い））
しますね。

——なるほど。僕らのイメージですと、たとえばメイクとかを目指される方が、オタク文化と接点があるというの
は、結構意外なんですけども。

Mさん：あー（それは、ご自身の中では、どういうつながりが…）専門学校に入るまでは、まあ、そこまでどっ
ぷりとオタク文化にはまっていたわけではなかったんですけど、その専門学校で仲良くなった子がすごくオタク
の子で、その子と仲良くなってから、こういう世界に入った感じですかね（笑い）。（その方は、どんな感じ
の活動をされていたんですか）その子はコスプレをしてたんですけど、その子と一緒にコスプレをはじめよう
になったんですよ。（なるほど、じゃあ、専門学校の時にコスプレをされていたと）そうですね。（どんな
作品の？）アニメキャラ、一番最初にしたのが『黒執事』（あー、なるほど。男装ですか）そうですね。（初
めてコスプレをして、いかがでしたか）いや、もう緊張しました。写真を撮ってもらうという経験が全然な
かったので、やっぱり、恥ずかしさとかはあったんですけど、昔からそういうコスプレとか興味あったので楽し
かったです。（コスプレに興味を持たれたのはいつ頃でしょうか）それも中学生の頃でしたね。（ということは、
中学校の頃は、アニメ・マンガだけでなく、その周辺と言いますか、メイドさんであったり、コスプレ
であったりに関心はすでもたれてた）そうですね。

——今はコスプレとかはされるんですか。

Mさん：今は、ずっと働いているので、暇がないんで、回数は少ないですけど、してるにはしています。（Aカ
フェで働き始めた後は、たとえば、どんなコスプレを？）そうですね、お店でする機会とかもあるので、ボー
カロイドの鏡音リンちゃんとか、いろいろしました。（その時に、このキャラクターのコスプレをするという
のは、どうやって決めるんですか）えー、でも、衣装のかわいさとか、やりやすさとかですかね。ウィッグセ
ットのしやすさとかで決めちゃいますね（笑い）。（あ、なるほどね。作りやすいとか）そうです。（結構、
お金かかるでしょう？）そうですね。それなりには。（作ったりされるわけですか）私はほとんど作れないで
すね。ちょっと手を加えたりするくらいとかはあるんですけど。（美容業界を目指しておられるわけですから、
ある種、ファッション的なものには敏感だと思うんですけども、そういうところからみて、ボーカロイドの格
好って、やっぱりかわいいですか？）あー、でももう種類が多いんで、とにかくかわいいんですよ。あとなんか、
デザインがすごく凝ってますね。（ふーん、なるほど）ドレスみたいなから制服みたいな感じのまで、い
ろんなものがあるので、見て「次にこれしたいな」って考えるだけでも楽しいです。

——これまで、好きなマンガ・アニメのキャラがあったと思うんですけども、どんなキャラがお好きですか。

Mさん：私が今一番好きなのは、『ラブライブ』っていうアニメのキャラクターですね。（あー、人気あります
ね。その中のどなたですか）西木野真姫（にしきの・まき）ちゃんと星空凛（ほしぞら・りん）ちゃんが好き
です。（それは、どのあたりがでしょうか。ボクはちょっとそのキャラを知らないんですけども）『ラブライ
ブ』とかは、歌がとにかくいっぱい出てるんですよ。アイドルさんなので。そういう曲を聴いていると、声が
いいなあって思っ。（あ、声がいいなあと）キャラクターとしても、なんかキャラが立っているというか、
かわいいんで。

——ということは、声優さんなんかにも、結構、関心をお持ちなんですね。

Mさん：そうですね。あんまり詳しくはないけども好きですね。（それは、女性の方ですか、男性の方ですか）
男性が特に好きで（たとえば、今でしたら）私はずっと谷山紀章が好きです。（あー、なるほど。はじめての
谷山さんとの出会いは）でも、たぶん、それも高校生とかのときくらいに、アニメイトに行って、たまたまCD

を見かけたんですよ。ジャケットがかっこいいなって思って、その時はまだ買わなかったんですけども、バンド名だけ見て帰ったんですよ。で、家で検索して、曲もかっこいいなと思って好きになりました。（それ以降も、他の声優さんたちも好きになりましたか）そうですね、ちょっとずつ好きな人がいたりします。（では、谷山さんとの出会いは、まずジャケットで「外側」を見てって感じですか）そうですね。（なるほど。それまで、谷山さんの声を意識してきいていたわけではないわけですね）あー、違いますね。

○Iさんの場合

——メイドに応募した当時から、アイドルオタクだったんですね。

Iさん：アイドルオタクでしたねえ、もう、かわいい女の子が大好きなので（笑い）。（なるほどなるほど。じゃあ、はじめて好きになったアイドルは、誰ですか）松浦亜弥ちゃん。小学校の時に松浦亜弥ちゃんが大好きで、もう、初めて買ったのも、あややのCDですし。（ただ、あの、まあその、アイドル好きな女の子って憧れみたいなものってあると思うんですけど、そのまま「ファン」になるっていうのは、なかなか珍しいかなと思うんですが、その辺は）なんか（笑い）、アイドルになって、自分が舞台に立ってやるというよりかは、そういう人たちを応援したいっていう気持ちが強かったんですね。で、かわいい女の子を見続けたいっていう、のがあったので（ふーん、なるほど）でまあ、自分は、その、ネイルも大好きだったんですよ。そっちのネイルとかファッションとか、服とかも大好きなので、そっちの業界に自分は行きたかったんで、まあ、そういう自分が舞台に立ってってキャラじゃないですし（笑い）、そっちを選んだので、まあ、今でもアイドルオタクです。

（松浦さんを知ったのは、何歳の時ですか）えー、でも、ホントにデビュー前から知ってます。あの、オーディションを受けてた時から（へえー）やってたじゃないですか、知ってますか。（あー）テレビで（はい）テレビでそういうのも中継、モー娘。の妹分みたいな（うーん）感じでオーディションやった時から、可愛いなあって思って、デビュー直後からもう大好きで。（ふーん）振りとかマネしてました。

——小学生の時とかは、もうすでに、アイドルとか好きだったわけですかね。

Iさん：好きでした。うん。音楽が好きだった。（あー、音楽）うちの家族みんな音楽が大好きで、ま、いまでもなんですけど、もうライブ一家なので。（あ、そうなんですか）母はもういまだに、あの一、ま、アイドルとは別で、私はロックバンドも好きなんですよ（あー、なるほど）で、そのロックバンドを母も好きで、一緒にロックバンドのライブに行ったりとか、兄と姉がいるんですけども、兄と姉もライブ、今は二人とも家庭があって子どもがいたりするので落ち着いてるんですけども。昔は、もうライブに行きまくってて、で、私ももう、年間何回行ってるかわかんないくらい。（へえー、すごい）来月とかでも、7回くらい（笑い）いったりとか（へえー）、ホントにもうライブ一家なので、音楽が大好きでした。（なるほどなるほど）ちっちゃいときから。（ふーん、その、たとえば、お父さんとかどういう傾向の音楽を聞かれるんですか）あ、でも、父、今いないんです。亡くなっているんです。でも、それが小2とかのときなんで、何聴いてたかわかんないんですけども、たぶん、母と同じような感じ（ふーん）。母も昔は、なんだっけ、フォークソング？（あー）とか、を聴いてたらしいです。

——なるほどなるほど。じゃあ、わりかしアニソンとかじゃなくて、いわゆる洋楽とかですかね。

Iさん：アニソンとかボカロとかは全然聴かなくて、で、洋楽とかっていうよりかは、なんていうんだろ、邦楽のギター系とかの、今でもバンドとかも全部邦楽なので、それが多いです。（ふーん、今例えば、お母様はどんなバンドを見に行かれるんですか）バンプ・オブ・チキン。（あー、なるほどね）とか、あたしが好きな（なんか『JAPAN』系なんですか）『JAPAN』ですね、めっちゃ、（『ROCKIN' ON JAPAN』系ですか）あ、完全に、あの一、アイドルオタクともう一つ私があるのがロキノン系（笑い）（あー、なるほど）、ロキノン系女子な

んですよ。なので、(サブカル女子ですね)母も完全にロキノン系になってしまっ。その、ロキノンのルーツが、兄が、えーと、中学校くらいの時、あたし、5歳離れてるんですけど、兄とは、兄が中学校ぐらいの時に、バンブ・オブ・チキンがもう大好きで、そっから、私も小学校のときに、たまたま兄ちゃんの聴いているやつを聴いて、どハマりして、そっからずーっと、ま、アイドルと一緒にこう、バンドも好きで来てるんですけど。(ふーん、なるほどなるほど)だから、あれですね、ずっと母とも行ってるし、まあ、周りにもそういう友達があふれてますね。バンドやっている子も多いので。

—こういうの好きな人って、アイドル音楽とか、馬鹿にしたりしませんか。

Iさん：そうそう、そうなんですよね。それはもうなんか、自分のなかで、それを言っちゃうと、ちょっとアイドルに失礼なところがあるかもしれないんですけども、私はアイドルに対しては、音楽を楽しむというよりは、パフォーマンス、その、なんていうんだろ、まあその、衣装とかであったりとか、その、見せ方であったりとか、そういう部分が好きなので、でも、音楽として聴くっていう意味では、こちらのロキノン系が好きなんですよ。生の音と言うか。でも、けっこうロパクも多いじゃないですか、アイドルさんは(まあ、パフォーマンスも激しい)なので、パフォーマンスをメインで、可愛い女の子ががんばって、一生懸命パフォーマンスをしてるっていう部分が大好きなので、それが応援したい部分なので。(ふーん)音楽を聴くっていう部分ではほんとにもう、生のギターの声だったり、ドラムの声だったりっていうのが大好きです。

—じゃあ、ご家族にはアイドルソングを聴く方はいないですか。

Iさん：いないです、まったく。(なるほどね。じゃあ、アイドル好きな部分は、ある種オリジナルなわけですか)そうですね、家族の中では誰もいない。

—ふーん、中学生の頃はいかがでした？

Iさん：中学生の頃も、でもほんとに、中学校に入って、好きな、その、バンブ・オブ・チキンでもそうですし、好きな趣味の子に出会ったりとか、みんなその辺で好きになってくるじゃないですか。音楽にもっと興味が湧いてきたりとか。そっからは、もうほんとに、友達とお小遣い出し合って、ライブ行こうみたいな感じで、もうそっから活動始まりました。(ああ、やっぱりいいですね、関西は。中学生でライブに行くってすごいですね)行ってましたね(笑い)。で、ちょっともう、お願いして、お母さんに。今月どうしてもこのライブがあるからっていってお手伝いとかして、出してもらってました。(僕は九州、熊本なんですけども、あんまり来ないんですよ。だからなかなかいけないんですけども、関西はね)なんか、大阪市内に住んでいるので、まあ、おつきい会場だったら、京セラ、城ホール、大阪城ホールとかあるんですけども、小さいところで、ライブハウスだったりとか、ほんとにもう、山ほど、あふれてるので。(ほんと、うらやましいです)で、なんか、その、ガンって売れすぎている人とかだと、ある程度金額は、チケット代高くなるんですけど、その当時のバンブ・オブ・チキンとかだったら、まだ3000円とか、ま3500円とかで見に行けてたんですね。Zepp Osakaがあった時代、いま、Zepp Nambaになっちゃったんですけど、Zepp Osakaがあった時代とかも、まだチケット代が安かったんで、がんばれば行ける、で、楽しいっていうのが、なんかもう、ホントに自分の中でも一番の楽しみでした。(なるほどなるほど)友達と行くっていうのが、それが。

—それでは、マンガとかとは接点も何にもないわけですか。

Iさん：まったくないですね。あ、兄は、読んでたみたいなんですけど、姉は、少女マンガとかにも一切ハマってないタイプなので、もう、こういうのの楽しみがあんまりわからなかったんですよ、幼い時から。(なるほどなるほど)で、ちょっと物心ついてからは、ずーっと小説読んでます(笑い)。(どのような小説を)ミステリーとか、サスペンスとかが多いんですけど。(今ですと、えーと、なんとか圭吾さんとか)東野圭吾さん

(笑い)。読みますね、はい。(ふーん、なるほど。じゃあ、本好きなんですね)本は好きなんですけど、絵がついちやうと、読む気失くしちやう(笑い)。(じゃあ、ラノベとかも全然読まれない?)ラノベもあんまり読まないですね。何冊か読んだことはあるんですよ、こういうのなんだっていうので、知識として入れたかったの(笑い)、読んだんですけど、やっぱりそっちよりは、ね、普通の小説がいいなあって。(中学生の頃は、部活動とかは)何にもしてないです(笑い)。(あー、そうなんですか)なんかもう、遊ぶことに夢中でしたね(笑い)。だからといって、勉強してなかったわけではないんですけど、勉強は、あの、家庭教師がついて(笑い)、(へえー、すごい)やってはいたんですけど(すごいなあ、お嬢様ですね)いえいえ、でももう、家庭教師付けながらライブに行くっていう(笑い)。結構自由な(ふーん)家なので(なるほど)自由にやらせてもらって、やりたいって思ったことは、やらせてもらってましたね。

—なるほど。そのあと、高校にあがって、高校は共学ですか(はい)。高校での趣味活動はいかがでしたか。
Iさん：もう全然変わらないですね。なんかフェスに行こうみたいな(笑い)。だからなんか、ちょっと、バイトとかもできるようになると、(そうですね)ある程度自分で使えるお金が増えると、もう、フェスとかって高いじゃないですか、いろんなアーティストさんが出るから。でも、ロキノン系とかって、自分が気になってたアーティストさんとか好きなアーティストさんがいっぱいにみられるっていう、もうすごいプラスな部分がいっぱいあるので、そうですね、なんかちっちゃいライブハウスからフェスに(笑い)なったりしてます。

—すごいですね。高校の頃もアイドルオタクもまあ。

Iさん：ありました、ありました、ずっと。でも、アイドルはライブ見に行かないんですよ。(ふーん、テレビですか)テレビとか、まあそうですね、あと、DVDとか買ったりもするんですけど。あの、ライブに行って、オタ芸とかができないので、なんか、いったらやりたい(笑い)けど、その一緒に行って、なんか、一人でライブに行けなくて、(ふんふん)でも周りにその、アイドル好きな方っていうのが全然なくて、だから行けないっていうのもあったんですけど。だから、テレビで楽しむ(ふんふん)って感じです。えー、もうほんとに、ライブはそっちのロキノンアーティストばかり(ふんふん)多かったです。(なるほど。あの一、まあ、わりかしこう、Aカフェに来ているメイドさんを見てましても、ときどきいらっしやいますね、ロキノン系を好きな人とか)そうですね。(わりかしこう、サブカル女子的な側面をお持ちな方も)なんかあの、最近、一人新人さんが入ったんですけど、その子はバンドもやってる。ギター弾きながら、ボーカルもやってる子で、その子と結構話が(笑い)合います。

—で、高校を卒業されてからは、専門学校に行かれていたわけですか。

Iさん：はい、専門です。(それは、ネイルとかそちらの感じの)はいそうです。ヘアメイクとネイルで、最終的にネイルの専攻に行くっていう。(じゃあ、ゆくゆくは、ネイルアーティストに、あ、されてたんですね、ネイルアーティストもね)してました。してたんですけど、なんかこう、深いところをいうと(笑い)、こうネイルの施術をして、最終的にご主人様、ご主人様じゃないや(笑い)まちがえた、お客さんに気に入ってもらえれば、ネリスト的には問題ないのかもしれないですけども、自分が思うように納得できなかったりとか、こう自分の技術が思うように向上しなかったりとかで、こうちょっと自分の中で、イライラが募ったりとかで、すごい、一番大好きなネイルがこのまま続けたら嫌いになりそうと思って(あー、なるほど)一度やめたんですよ。で、まあ、でも、もう一度復帰したいっていう気持ちがあったから、アパレルだったら爪とかまで全部やっても問題ないというか、そっちの方が、まあ、いいので、それでやってたんですけど、でもなんか、思うように戻れなくて。でも、趣味でいいやって。(なるほどなるほど)今でも趣味で、友達にやっています。

○Jさんの場合

——ご自分でオタクとおっしゃられていますけども、マンガやアニメはお好きですか。

Jさん：大好きです。（いつごろからですか？）もう、物心ついた時からずっとです。（物心ついた時から？）一番最初は、『アンパンマン』がすごく好きで、『アンパンマン』から始まって、『セーラームーン』になって、ずーっと。（『セーラームーン』は、何歳くらいのときですか）幼稚園くらいの時ですかね。（『セーラームーン』は、どの辺に惹かれましたか）変身（変身！？）するところですね。変身して、女の子が戦うところです。（それは、「戦う」というところがいいんですかね？）そうです。女の子が、なんか、それまではずっと、『仮面ライダー』とか『ウルトラマン』とか、ヒーロー、『アンパンマン』とか、男の子が戦うみたいな感じだったんですけど（そうですね）、女の子が変身して、すごいなんかもう、めちゃかわいいアイテムとかかっこいいアイテムとかあって、敵倒すっていうのがもう、すごいあこがれました。（なるほどなるほど。そういうのをきっかけに、マンガ・アニメにハマっていかれたという感じですかね）ハマってますねー。（『セーラームーン』の次は何でしょう？）『魔法騎士レイアース』っていう（あー、『レイアース』ですね）はい。（『レイアース』は、小学生くらいですか？）いや、あれも、幼稚園です。（なるほどなるほど。じゃあ、魔法少女ものですかね、基本的には）そうですね、入りは魔法少女ものでした。

——小学生の頃ですと、どんなものをみておられましたか。

Jさん：小学生の時は、そうですね、えーと、小学生の時にちょうど『カードキャプターさくら』をみていたのと、『ふしぎ遊戯』の作者（池田註：渡瀬悠宇）の方の『妖しのセレス』っていうのがあって、あれがすごい好きで、ちょうど小学校の3年生かそれくらいだったんですが、すごいハマって、あれ、一番最初に買ったマンガですね。（そうなんですね。小学校の時にマンガ買ったわけですね）買いました。（でもまあ、全部、女性が戦うものですね、基本的に）そうですね。（『妖しのセレス』は、ちょっとあんまり知らないんですけども、女性が戦うモノですよ）女性、少女マンガが、結構読んでいるのが多くて、と、『ドラゴンボール』とかも読んでたんですけども。（その、ジャンプマンガとかはどうですか、小学生の時は）あー、ジャンプにハマったのは、小学校の後半くらいで、『テニスの王子様』にすごいハマりました。『NARUTO』と『テニスの王子様』と、あと、『BLEACH』と、すごいハマりました。（なるほどなるほど。その当時は、周囲の仲間とかも、マンガ好きがいたんですかね？友達とか）いたり、いなかったりです。私の世代まではまだ、オタクを隠してたんですよ（あー）小学校、中学校は。（ということは、あまり、そういうことは言っていなかったわけですが、周囲には）私は言っていたんですけども、周りが隠したりするんで、あんまりそういう友達ができなかった。（なるほどなるほど（笑い）でも、『カードキャプターさくら』とかは、そんなにオタクっぽくはないような、まあね、男性が見ていたら、たいぶオタクっぽいかもしれませんが、『テニプリ』はそうかもしれませんね）そうですね、『テニプリ』はすごかった。

——同人誌とかはみたりされてましたか。

Jさん：あー、一番最初に買った同人誌は、『NARUTO』でした（笑い）。（小学校の時の？）小学校の時に（笑い）。（早いですね！？）いや、なんか、すごい絵がきれいな人が書いてはって、で、私はあの、公式で出てるなんかその違うやつやと思ったんですよ。で、話もやたら、話もすごいうまかったんで、あ、これ、漫画家さんが書いているやつなんやと思ってたんですよ、ずっと。そしたら、そういう知識を得ていくうちに、あ、これは同人というやつで、これは違うんや。作家さんが書いているけど、これは公式で出てるやつやないんやと気づきました。（それは、知ったのはいつくらいですか）中学校の時でした。（それは、普通の同人ですか、BL系ですか）あ、BLも入っているし、ノーマルも入っているし、百合も入っている。全部入ってたんですよ。（あ、アンソロジーですか）はい。（それを小学生の時に買われた？）はい（『NARUTO』の？）はい、『NARUTO』の。

（『NARUTO』は当時は、カップリングとか意識されていたんですか。そういうのは無しで）当時は、その本を読んで、あの一、カップリングが決まりました（一同 笑い）。は一つてなります。（誰と誰ですか？）サスケとナルトです。（ああ、そうなんですね。意外と王道そうで、そうでもないカップリングのような気もしますが）その時は王道だったんですけども。（そうなんですか。今だと「カカ×イル」とかその辺が王道なんかなと思ったりしますが）その時は、王道やったんですよ。サスケとナルトが、なんか、一緒に、チームというか、班組んで、一緒に行動している時やったんで。（その、男性同士が恋愛する内容のものだと思うんですけども）はい（初めて読まれた時の衝撃っていうか、どう思われました？）あー、でも、『セーラームーン』とかでもそういう描写があったんです。（あ、女性同士が）はい。なんで、なにかもう、すんなり「あつ、そういうものなんだ」って。（なるほど。すんなりはいったわけですね（笑い）なるほど。）愛の形だって。

——なるほど。で、中学校にあがると、もっと拍車がかかる、マンガアニメ好きに？

Jさん：そーですね、中学校は、途中でビジュアル系にはまっちゃって、何かもう半分くらいです。半分、ビジュアル系好き、みたいな。（その時は、ご自分がオタク的な嗜好をもっているということは、オープンにされてましたか）してました。（周囲にもそういう人）はい（いましたか。話が合うと、どんどん深まっていくとか）そうですね。たぶん、仲間が欲しかったんだと思います。（では、仲間ができたわけですね、中学校の時に）あんまりできなかったですね。（あ、あんまりできなかったですか）あんまりできなかったですね。高校に入った時が、『涼宮ハルヒの憂鬱』を放送したぐらいやったんですよ。あれで、なんか、オタクでも恥ずかしいみたいになって（おー、なるほどなるほど）なんか、そういう友達ができただんですけども、それまでは全然。（そうですね。『涼宮ハルヒ』の影響で、周りもちょっと変わった感じ）そうですね。（なるほど。そんなに『涼宮ハルヒ』っていうのはすごいですね）すごいつて思ってます、私は。

——ビジュアル系の方は、どんな理由でファンになられたんですか。

Jさん：見てたアニメのエンディングを歌ってはって、好きなアーティストが。すごい良くて、CDを買ったんですよ。もう、そのCDが、アルバムやったんですけども、全部良くて、曲が。プロモーション見たいと思ってネットも探して、で、ライブとかもめっちゃ見ました。（ライブには行かれたんですか）いや、行くお金はなかったんで、DVDをおこづかいためて、で、CDもTUTAYAで借りてみたい。（なんというバンドですか）ジャンヌダルク（Janne Da Arc）です。（あー、ジャンヌダルクですか。なるほどなるほど。まあ、あまり知りませんが、名前くらいは聞いたことあります）『アソボット戦記五九』っていうアニメがあったんですけど、そのエンディングの「霞ゆく空背にして」という曲があって、それがすごい好きで、その曲が一番好きなんですけど、その曲を聴いて、ジャンヌダルクにめちゃハマりました。（おー、なるほどなるほど。それが中学生？）中2です。（中2の時に、たとえば、部活動とかは）やってなかったです。帰宅部だったので。（っていうことは、オタ活とビジュアル系の活動をされていたわけですね）そうですね。

——その後、高校にあがってからは、どうでしょうか。

Jさん：高校にあがって、で、部活やりながらバイトもやって、で、ビジュアル系半分、オタク半分みたいな。そのまま、延長です。（うーん、なるほどです。じゃあ、そこはあまり変化はない？）変化はなく。

——で、その後、高校卒業されてからは？

Jさん：高校卒業してからは、高校卒業してからも、そんなに変わらないです。（専門学校か何かに行かれてたんですか）あ、内定決まって、就職先があったんですけど、身体壊してしまって、行けなくなってしまって、そこからずっとフリーターです。（じゃあ、まあ、その後、Aカフェを受けるということになるわけですね。高校を卒業されて、Aカフェに来る間も、まあ、マンガ・アニメとヴィジュアルと半分半分）高校の途中で、ジャ

ンヌダルクが活動休止になったんで（あー、なるほど）もうずっとジャンヌダルクは好きなんですけど、ソロ（池田註：Acid Black Cherry）やっているのも好きなんです、なんかもう、オタク色の方が強くなりました。（別のビジュアル系にハマったりは）は、しなかったです。（あー、じゃあ、ジャンヌダルクがお好きだったんですかね）そうですね。（なるほど）他のもちよちよく聞いたんですけど、もうずっと好きなのはジャンヌダルク。（いまなら、シド（SID）なんかも人気ですけども、全然、それほど関心は？）メジャー前からいいなと思っていたんですけども、でもなんか、メジャーになっても、ライブに行ったんですけど、でも、そんなになんか、「うわー、もう毎年ライブいかな」にはならなかった。（やっぱりジャンヌダルクが理想？）もうすごい好きで（それはすごいですね。どの辺が他のバンドと違う魅力があるんでしょう？）えー、ボーカルの声がすごいいんですよ。ボーカルの声がすごい良くて、曲もすごいきれいで（ふーん）きれいだし、格好いいし、なんかすごい、映像が出てくるんです、曲を聴いていると。そういうのがとかすごい面白くて、聞いてました。（どんな世界観ですかね、ジャンヌダルクって）私は幻想的だなんて思ったんです。かっこいいし、いいバンドやと思うんですけど。

——高校時代は、マンガ・アニメはどの辺をみておられたんですか？

Jさん：高校時代は、えー、結構、あっ『コードギアス』とか（あー、そうか『コードギアス』）『アクエリオン』とか（ふーん）ロボット系を見るようになったのが、高校くらいです。（うーん、なるほど。『コードギアス』は、どれかのキャラクターのファン？）CLAMPがすごい好きなんですよ。（なるほどなるほど）CLAMPがすごい好きで、キャラクターデザインをやってはったんで、「あ、見よう」と思って見たら、だだハマりしてしまって、すごいい面白（うーん。コスプレとかはされているんですか）高校のときは、一回友達に誘われてやったんですけど、でも全然それきりで、それ以外はやってなくて。（なるほどなるほど。ロボットアニメとかは、ぜんぜん抵抗はないわけですか）あ、ない。大好きです。（バトル物は好きなんですかね、基本的に）バトル物、大好きです。（特撮とかは見られないですか）特撮は（仮面ライダーとか見られないですか）仮面ライダーは『アギト』で止まってるんです。（『アギト』名作ですけどね。すばらしい）ウルトラマンも『ガイア』で終わってるんです。（でも、『ガイア』まではみておられたわけですね）でも、『ティガ』『ダイナ』『ガイア』しかみてないです（笑い）（いやいや、見てるだけでもすごいです）いやー、弟がいるんで。（あー、なるほど。弟さんと一緒に）戦隊物も、『ハリケンジャー』くらいまでしかみてないです。（いや、すごいです。っていうことは、まあ、『クウガ』と）あ、そうです。『アギト』と（『アギト』だけみられたと。うーん、すごいですね。オタク系のジャンルが大体入っている。特撮、BL、魔法少女があつて）いやー（なかなか幅広くおさえておられる感じですね）全然見たくても、見てないのいっぱいあるんで（まあ、今は、マンガ・アニメといっても作品数多いですからね。）

4 メイド喫茶でのコミュニケーション

前回、前々回も書いたように、Aカフェでは、メイドたちはメイド同士で、そして客との関係でも、趣味的なコミュニケーションを楽しんでいるように見える。その場合、マンガやアニメ、あるいはアイドルなどがテーマになることも多い。今回の3名のインタビューからも、そのことはうかがえる。

(1) メイド同士の関係

OMさんの場合

——他のメイドさんとの関係はいかがですか。

Mさん：うちのメイドさんはだいたいみんな仲良しですね。（みんな、アニメとかお好きですか）みんな好きで

すね。(そういう環境はいかがですか) や、でも、趣味があうっていうのが、すごいうれしいので、話しやすいですし、気楽ですね。

—では、主には、メイドさんとマンガやアニメの話をされる？

Mさん：そうですね。(たとえば、美容の話とかはされますか) 美容の話はあんまり(ファッションの話とか) しないですね。もうなんか、着替える瞬間くらいしか私服で会う時がないので。たまに遊びに行ったりするんですけど。(あ、遊びに行かれるんですね) はい(そういうときは、どんなところに行かれるんですか) や、でも、お給仕終わった後に飲みに行ったりとか(笑い)、一緒にメイドカフェ行ったりとかすることが多いですね。(そういえば、ブログにも一緒に遊びに行ったことが書いてありましたね) そうですね。(どちらに行かれたんですか) あ、でも昨日も行ってきたんですけど、Rさんと他のメイドカフェに行ってきました。(どこがいいですか、女性の目から見ても) 私はあんまり行ったことないんですけど、行った数とか少ないんですけど、Bカフェさん(池田註：日本橋にあるメイド喫茶)好きですね。

—ボクは基本的にはAカフェしかいかないので、他にもいかないといかんかと最近思っていて、どういうところがいいかなと思っていたところです。

Mさん：あー、でもなんか、どの店もちょっとずつタイプが違うので、私はBカフェさんがかわいい女の子いるし、好きでしたね。(他のお店のメイドさんとの付き合いはどうですか) 私は、ぜんぜんないですね。結構、Aカフェに来てくれるメイドさんとは話したりしますが、個人的な関わりはないですね。

—Aカフェのメイドさんとプライベートで遊ぶとかは

Mさん：たまにありますね。(買い物に行ったり?) 買い物にも行きますし、一緒に映画行ったり、お祭り行ったりもしました。

—カフェのスタッフブログがありますが、投稿する前に、誰か、こういうことを書いたらいけないとか、チェックが入るわけですか。それとも、もう自分で書いて、パッとあげる？

Mさん：もう、個人の判断で書いてます。(それは、信用されているわけですね) 一応、メイドさんたちもブログはチェックしているので、何かここは良くないんじゃないかというところがあったりしたら、修正とかはしたりしますね。(では、そういうことをお互いで話すわけですね) そうですね。(それは、お店の中で話されるわけですか) お店でも話しますし、メイドさん全員でやっているLINEがあるので、業務連絡とかで。[中略] 本来業務連絡なんですけど、たまに暴走して趣味のこととか書きちゃうときもあるんですけど(笑い)(そういう時は、話は弾むんですか) そうですね、一部の同じような趣味の人と(笑い)。

○Iさんの場合

—メイドさん同士の関係はいかがですか。

Iさん：メイドさん同士は、私なんか、プライベートが、みんなにもすごいリア充、リア充って、すごい言われるんですよ。なんか、非リア充の人が多いで(笑い)(まあ、オタクの人はそういいますよね) めっちゃ、リア充、リア充って言われるんですけど、プライベートが友達と遊ぶのが、時間がとりすぎて、メイドさんと遊ぶ時間ってないんで、そこ、なんか、ほんとにお店でしかお話しとかしてないし、できないんですけど。でも、ホントに、先輩方誰一人として、なんかその、いじめとかないですし(笑い)、すごい優しく、いつつもいじられます。ずっと、いじられキャラです。(へえー)でも、それがすごい楽しいし、愛のあるいじりなので、受けとめてます(笑い)。

○Jさんの場合

—Aカフェのメイドさん同士の関係は、いかがですか。

Jさん：あー、もう、Aカフェのメイドさんが大好きなんです。（そうなんですか（笑い））はい。卒業された先輩とか、ほんと、みんな大好きで（あー、なるほど）ホームページで、すごい、うわ、むっちゃかわいい女の子いっぱいおると思って、で、ホント入って、受かると思ってなかったんで、ホント嬉しくて。すごいもう、先輩とかも、すごいよくしてくれて。後輩にも伝えていこうと思って、今がんばってます。

—なるほど。Aカフェの先輩たちの接客とかを見て、いかがですか。

Jさん：やー、もう、いいな、楽しそうだなと。楽しそうに給仕されている方がホントたくさんいたので（その先輩方の働きぶりと今の自分の接客を比べてどうですか）えー（同じように、ナチュラルにこう）いや、まだまだ全然。だめです、だめなところが、失敗が多いんで（ふーん、どのあたりが多いですか、失敗は）何だろ、初歩的なミスがホントに多くて（ふーん）わっあってなると、わっあってなっちゃうんで。（たとえば、どんなところが）えー、伝票書き忘れてとか（あー、はあはあ、なるほどですね）しますね。

—結構、BL好きもいるでしょう、Aカフェには。

Jさん：います、います。（話が合う、ですよ、そしたら）合いますね。楽しいです。（天国じゃないですか）ほんとに〜。（入ってよかったですよ）ほんとに入ってよかったです。

—そういうのは、狙っていかれたわけですか。オタク、さっきちょっと言っておられましたけど、オタクな話したいと。

Jさん：ああ、したかったです、オタク話。（じゃあ、狙い通り）はい。女の子の友達が全然いないんですよ。男の子の友達とかまったくいないんですけど。もう、なんか、兄弟がすごい多いんで、兄弟で、こう、なんか、わーっと遊ぶことが多かったんで、ほんとに、まったく、なんかもう、コミュ症なのか、人見知りではないんですけど、もうなんか、女の子の友達がほんとできなくて。で、もうAカフェ入って、なんか、Aカフェのメイドとかすごいみんなしゃべってくれたりとか、一緒にマンガ貸し合ったりしてくれるんで、すごい楽しいです。

（2）客とのコミュニケーション

○Mさんの場合

—お客さんと話して、情報をもらったりもしますか。

Mさん：あー、もらったりします。なんか、もう、このアニメの新作みたいなのが良かったよとか、このマンガ面白いよみたいな情報とか、そういうのをすごく参考にしています。

—でも、まあ、もう一年以上続けておられるわけですけども、一番のメイドしている面白みっての言うのは、どのあたりでしょう。

Mさん：えー、面白み？やっぱり普通なんですけど、ご主人様方とアニメとか自分の好きなモノの話ができるということですかね。イベントも楽しいですし。（あー、Aカフェ内でやっているものですか）そうですね。

——メイドになってみたら、思った以上に大変でしたか。

Mさん：そうですね、大変なところも多いですけど、なんか、癒し的な部分があります（笑い）。

——あー、働く側が癒しですか。

Mさん：そうですね。（それは、どのあたりでしょう）なんていうんですかね、もう、話すこと自体が癒しみたいな。御主人様とかと、「今日もあんな話ができな〜」みたいな、「次はこんな話しようかな」みたいな。そういうの自体が癒しです。（じゃあ、コミュニケーション自体がすごい好きなんですね）好きなんですけど、苦手ですね（笑い）。

ここで、一言付け加えておきたい。強調しておいたように、Mさんは「話すこと自体が癒し」と語っている。コミュニケーションの効果（とくに、好きな話題でコミュニケーションできたときの）として、やはり「癒し」という視点は欠かせないであろう。

以前、メイド喫茶でのコミュニケーションは「積極的儀礼としてのコミュニケーション」といえるのではないかと指摘しておいた⁶。周知のとおり、積極的儀礼とは、エミール・デュルケムの言葉である。しかし、その言葉に結びつけるには、もう少し検討が必要である。ここでは、指摘だけに留めておきたい。

○Iさんの場合

——で、あらためてメイドになられたわけですけども、なってみられてどうですか。外から見てたイメージと。

Iさん：全然変わらないんですけど、すごい、なんていうんだろ、周りから言われてたのもあって、なんか、変な人多いよとか、すごい言われてたんですけど、Aカフェのお客さんってホントにあったかくて、すごい良い方が多いですね。で、Aカフェの、それはお店の雰囲気がそうさせているのかもしれないんですけど、だから、思ったよりももっともっと良かったです、イメージが。だからちょっとなんか、気を付けないといけない部分とかあるかなってこう、自分の身は自分で守らないといけないじゃないけど、そういう部分もあるかなって思ってたんですけど、そんな心配もいらなくらいホントに、すごい良い方が多い。だからもう毎日が楽しくて、Aカフェのバイトがない日はすごい寂しい（笑い）。

——それはいいですね。接客とかはどうですか。あの一、まあ、普通の喫茶店と違って、しゃべらないといけないじゃないですか。

Iさん：しゃべらないといけないっていうものは全然ないです。なんか、店長もいつもいつているんですけど、プラスアルファだから、みたいな。忙しいときにあえて話に行く必要なんてないし、ちゃんとウェイトレスの、その、業務をこなしたうえで、空き時間があつたら、みたいな感じなので、別に話に行かなくていいよ、っていう感じなんですけど。でもまあ、まったりしてる時間とかも、いまさっきも、ちょっとまったりしてたと思うんですけど、まったりしている時間とかは、何かへんにみんなカウンターにこもってもあれなんで、ご主人様とお話ししに行くんですけど、ホントに楽しいですね。

——あの一、アイドルネタは結構通用する感じですか。

Iさん：はい、あたしなんかよりも、もちろん現場にいらっしゃる方が多いので、もう聴いててすごい楽しいですし、「あ、そうなんですわ」っていうことが多くて。だから、すごいなんか、自分が思ってたよりも、現場に行きたくなりました（笑い）、聞くと。〔中略〕結構、いろんなものに興味があるので、自分が興味のあること

⁶ 池田太臣「オタク女子を考える オタク女子の登場とメイドカフェ」『武庫川女子大学生生活美学研究所紀要』第24号（武庫川女子大学生生活美学研究所編集委員会編：2014,118）

は、なんていうんだろ、知っておきたいというか。で、他の、ご主人様で、アイドル好きじゃない方でも、アニメの話とか聞くと、すごいうれしいですし、知れない世界を知れるので、毎日新鮮で楽しいですね。

——メルに入って、自分が変わったなあと思うことはないですか。

Iさん：変わった、なんかあるかなあ。全然ないですね。（アイドルの知識が増えたぐらい？）そうですね。アイドルの知識とか、本に関しての知識が増えたのと、まあ、もちろん、年齢層もいろんな方が来るので、普段お話ししない世代の方とお話しする機会があるので、そうですね、なんか、いままで接客してたのが、ショップ店員とかだから、いってみたら、同世代の女の子だったり、ま、ちょっと上の女性だったりとかぐらいだったんで、男性で、こんな幅広い方の、幅広い年齢の方に接する機会がなかったんで、そういう部分では、勉強になるというか。

○Jさんの場合

——初めて、お給仕した日のことは覚えておられますか？

Jさん：覚えてます～（どんな感じでした、はじめは）もう、声が小さすぎて（池田 笑い）、すごい声が小さいって言われました。（あ、そうなんですね。その、服を着られてどうですか。憧れの服だったと思うんですけども）あ、細いなと思いました。（細い？）みんな、細いねんなと思って。き、きつって思いました（一同 笑い）。（なるほど、入ってくるお客さんに「おかえりなさいませ」って言わないといけないですけども）あ、それは一、でも、声が小さいって言われました。（なるほどですね）なんか、ホントに、ご主人様たちもお嬢様も、すごい優しくて、Aカフェのご主人様、お嬢様は。こうするんだよ、ああするんだよとかって教えてくれるんで、失敗したりしてもなんか、大丈夫やでみたい。めっちゃくちゃ甘やかしてもらいました（笑い）。（みんな、優しいですもんね）優しいですね、ホントに。

——お客さん、基本的にマンガとか好きな方が多いですか。

Jさん：なんかもう、私の話を聞いてもらってます（一同 笑い）。「昨日、これみたんですよ～」とか「このマンガ買ったんですよ～」とか、はい。みんな優しいんで、聞いてくれます（笑い）。

——中に入って見て、実際働いてみられて、どうでしょう？印象は、外から見ていたものと。

Jさん：もっと、なんか、ほんとにアニメとかマンガの話だけなんだと思ってたんですけど、すごいアイドル好きな人多くて、私アイドルが全くわからないんです。（ふんふん）ほんとわかんなくて、AKBとかもほんとにわからなくて、もうなんか、どうしようと思いました、当時は。AKBは知ってるよねみたいな、ちょうど入った時がAKB結構、知名度上がってたので、でもわからなくて、妹がころうじて好きやったので、妹に、なんか、聞いて、「誰が人気あるの」とか、「この子、何て名前なん」みたいなのか、「何の曲がいいの」って聞いて、教えてもらって、勉強したんです。（あ、一応、勉強されるんですね。すごいです）ぜんぜん、覚えられなかったです（笑い）（まー、僕も全然わからないんですけど、覚えられないですよ。たくさんいるから）はい（でも、まあ、Aカフェでしゃべっていると、マンガ、アニメで大体けるんじゃないですか、そうでもないですか）知らないものがめっちゃありました。

——Aカフェで働くようになって、ご自分が変わったところとか、ありますかでしょうか。

Jさん：あー、変わったところ、（よりマンガに詳しくなったとか）それはでもあります。ほんとに、ほんとに、なんか普通、小説とか、普通の本とか読まなかったんです。（ふんふん）『ハリーポッター』とか全然読めなくて、活字が読めなくて、もう、あの一、普通の凄い面白いよっていう小説を覚えてもらったのを、初めてハ

ードカバーで読んだんですけど、すごい面白いなと思って。本が読めるようになりました。

Mさん、Iさん、Jさんの3名の話を知っても、やはり、趣味的な話題のコミュニケーションであるとか、情報交換が働く上での楽しみになっていることがわかる。

5 メイド喫茶で働いていることを、周囲に話しているか

前回、前々回までに紹介した6名には、この質問をしていなかった。インタビューをずっとしてきて、ここに来て思いついた質問をはじめて投げかけてみた。

メイド喫茶は、誤解されやすいところがある。たとえば、キャバクラといった業態と一緒にのものと考えられやすい。もちろん、キャバクラ自体を否定するわけではないが、メイド喫茶とキャバクラは別物であるのも確かである。そのあたりのことをどう考えているのか聞いてみた。

○Mさんの場合

——メイドカフェで働いていることは、友達とかご家族には言っておられるわけですか。

Mさん：あー、家族には言っていないですね。（あー、そうですか）もうなんか、20歳超えたら自己責任だしいいかな、みたいな（笑い）。あんまり言ったら、心配されたりするかもしれないので。（お友だちとかには言ってますか）友だちには言ってます。（友だちが店に来てくれたりしますか）たまに来てくれますね。その一緒にコスプレしている友だちだったりとか。

○Iさんの場合

——メイド喫茶というのは、知らない人に誤解されやすい（されますね）場所であるわけですが、ご両親とか、ご心配とかされないんですか。

Iさん：あ、もう全然、大丈夫です。お母さんが、すごい考え方が柔らかい方なので。まあ、もちろん、ロリータやるにしても、「あ、もう、いいよいいよ、全然、好きなようにやればいいよ」みたいな感じなんで、特になんにも。逆に、お母さんは友達と行きたいなあ（笑い）って、言うぐらいに、なんで、なんの問題もなく。やりたいことはやっていた方がいいし、そういうメイドとかって、ほんとに、年齢とかも多分あるだろうから、自分がこうしかないなって思うんだったら、後悔するまでやっておいで、しないで後悔するより、して後悔した方がいいっていつもいうタイプなので（すごい人ですね）そーなんです。お母さん、ほんと（理解のある）超偉大な方（笑い）。すごいポジティブな人なんで、私がマイナスになった時も、もうマイナスになってぐわーって落ちてても、ぐわーって引き上げてくれる人なんですよ（笑い）。だから、もう、すごい救われてます、お母さんに。（なるほど。お母さんにも、一度来ていただきたい感じですね）そうですね。でも、近いうち来るって言ってましたよ。お母さんの友達も行く気満々だって言ってたから（笑い）。（変わってまますねえ）不思議な一家です、うちは。

——たとえば、専門学校で知り合った友達とかが、Aカフェに遊びに来たりは。

Iさん：そうですね、あんまり呼んでないです（え）呼んでないですね、呼んでないですけど、ちょいちょい来てくれたりはしてます。（うーん、一応、友達とかにも、まあ、メイドカフェで働いていることは、オープンにされてるわけですか）はい、言ってます。なんか昔から知ってる子とかは、「だよね」みたいな、「そうだよね」みたいな、びっくりもしないし、「似合いそう」みたいな感じ（似合いそうって言われるわけですか）もうそんな感じ、昔っからそんな感じだったんで。（なるほどなるほど。ってことは、まあ、ある程度、ロリ

一タだったり、アイドル好きだったりというところで、みなさん、ぼんやりとなんかこう) そうですね (Iさんと、メイド喫茶は近い) 近い、まったくなんかたぶん、驚きとか、たぶんゼロ (笑い)。驚いた人いないですね、働いてるって言って。「うーん、そうだよ」って言われる。昔から、そんなキャラでした、ね。

付け加えておくと、Iさんは、中学生の頃からロリータファッションの愛好家である。また、幼い時から「お姫様」に憧れていた部分もある。そのことが、メイド服好きにつながっているところがある。

○Jさんの場合

——メイド喫茶というのは、わりかしこう、知らない人から見れば、誤解されやすい場で、働いていると思うんですけども、その辺、抵抗はなかったですかね、選ばれるときに。

Jさん：そこは、Aカフェはなかったですね。とりあえず、そのなんか、ほんとに萌え萌えしてないところが良かったんで、そういうのじゃないっていうを調べたんで、行きました。

——ご両親とかは何とも思われなかったんですかね。そういところでバイトするっていうのは。

Jさん：なんかもう、オタクって知っているんで (池田 笑い)、まあ、もう最後やしなみたいな感じで。まあ、いんちゃうかーみたいな。(なるほど。オタクならしょうがないみたいな) はい。(なるほど。ご兄弟とかも、当然ご存知でしょうけども) もう、親戚とかも知っています (笑い)。(特に止めるあれでもなかったですか) あー、もう、全然なかったです。お母さんとかも、一回来てくれたんですよ、母親が。(それはいいですね) きてくれて。(なんかね、外から見ると、誤解されやすいとこなんで) そうですね。

おわりに

以上、3名のメイドのインタビュー内容の一部を紹介してきた。まず、メイドとして働こうと思った動機について紹介した。次に、3名のオタク文化との関わりを、時系列に整理して紹介した。最後に、メイド喫茶でのメイド同士の、そしてメイドと客とのコミュニケーションについて語られたことを載せている。

これで、インタビュー報告は、すべて終了である。前回、前々回もそうだったが、すべてを紹介できないのがとても悔やまれる。9名のメイドさんみんなが個性的で、話を聞いていてとても興味深かった。

9名へのインタビューとそれをまとめる時間は、私にとって、とても楽しい時間であった。Aカフェのメイドさんたちの半生を、わずかではあるが、ここに書き留めておくことができたことをとてもうれしく思っている。

最後になったが、協力いただいたMさん、Iさん、Jさん、そしてそのインタビューの段取りの労を取っていただいたAカフェ店長のGさん、オーナーのDさんに、感謝の意を表しておきたい。なお、9名のインタビューをまとめた上での考察は、現在、別稿を準備中である。そこで詳しく論じたい。

【参考文献】

池田太臣、2012、「オタク女子の楽園～メイドグラフィティ in 大阪日本橋 (1)」、女子学研究会編『女子学研究2』、76-90

池田太臣、2014、「オタク女子を考える オタク女子の登場とメイドカフェ」、武庫川女子大学生生活美学研究所編集委員会編『武庫川女子大学生生活美学研究所紀要』第24号、109-121

池田太臣、2014、「オタク的コミュニケーションの悦楽～メイドグラフィティ in 大阪日本橋 (2)」、女子学研究会編『女子学研究4』、14-23